

《2024年度 ICD日本部会 総会・認証式 特別講演》

「ことば」の世界： 言語という観点から世界と人間を俯瞰する

早稲田大学 名誉教授
早稲田大学 理工学術院



片 田 房

●抄 録●

ヒトという種に特有の母語の獲得能力とそのプロセスを理解することは、英語が国際共通語（リング・フランカ）となったグローバル化の時代において特に大きな意味を持つ。本稿では、世界言語の諸相と言語学という学問分野を紹介すると共に、母語と思考が融合する発達過程を概観し、コミュニケーション手段としての英語に替わり得る“サイバー・リング・フランカ”の登場と変貌期にある21世紀の言語運用能力像を提示する。

キーワード：言語獲得能力、母語基盤の教育、国際共通語、サイバー・リング・フランカ、オート（マルチ）リンガリズム

I. 世界言語の諸相

1999年、ユネスコが2月21日を国際母語デー“International Mother Language Day (IMLD)”と制定し、7,000語以上も存在する多様な言語（母語）の尊重と、其々の母語による学校教育—母語基盤の教育—の重要性への認識を喚起して今日に至っている。表1の数の対比（国の数 vs. 言語の数）は、言語の多様性を実感する上で有効である。

ちなみに、50%~90%もの言語が消滅の危機に瀕しているとの推定値がある（片田 2005）。動植物種の消滅が世界的に問題視される一方で、ほぼ同一の理由に起因する「言語の消滅」が話題になることは、少なく

とも日本においては稀である。

II. 言語学の三大革命

—認知科学としての言語学の登場—

言語学という学問分野は、三つの革命を経て到達した認知科学の一領域である。第一の革命は、音素（言語の核）と音韻の規則が発見され、それまで神話の世界の話であった古代の言語の科学的再現が可能となった約250年前に遡る。例えば、英語の音素— [d], [g], [ɔ] —の配列は、論理的には6通り（ ${}_3P_3 = 3 \times 2 \times 1$ ）の可能性があるが、どの配列でも意味を成すわけではない。子音 [d] と [g] の連続は許容しな

表1 世界言語の諸相 (Phases of the World Languages)

世界人口 → 81億1,900万人	出典：総務省統計局「世界の統計2024」
国の数 → 196（内、国連加盟国は193）	
言語の数 → 7,139	出典：SIL International Ethnologue 2024
独自の書字体系を持つ言語 → 全体の約5%	約95%は生来的な無文字口承言語

いという英語の音韻の規則により、(5) と (6) のみ意味のある単語を構成する。(＊は非語を表す。)

- (1) ＊ [d] - [g] - [ɔ] 'dgo'
- (2) ＊ [g] - [d] - [ɔ] 'gdo'
- (3) ＊ [ɔ] - [d] - [g] 'odg'
- (4) ＊ [ɔ] - [g] - [d] 'ogd'
- (5) [d] - [ɔ] - [g] 'dog'
- (6) [g] - [ɔ] - [d] 'God'

この発見は遺伝子解読のヒントとなり、DNA上の4種類の塩基 (A, T, G, C) の配列によって規定される生命の遺伝情報の発見につながった。

第二の革命は、言語自体の体系とその体系を組み立てる規則が発見された約150年前に遡る。語順や照応関係をはじめとする統語の体系などがその一例である。

第三の革命は、「文章を際限なく産み出すことのできる人間の能力に着目した普遍文法という言語観」と「文章産出のメカニズムを数学にも通じる単純な規則によって記述する生成文法」(Chomsky 1957) が提示された1957年に起こったといえる。その大きな特徴は、言語を獲得する能力を「ヒトという種の脳にプログラムされた生得的な能力」と捉えたことにある。

Ⅲ. 母語獲得の原理

幼児期前半 (生後2・3才の頃まで) における幼児 (の脳) は、聴覚を通して家庭内で話される言語に刺激されながら①～④の順に発達し、この発達に個人差が少ないことを特徴とする。

①手鳴し行動 (反射運動) → ②指差し行動 (発語の前兆) → ③ネーミング行動 (事物への名称付与) → ④語彙爆発 (語彙獲得の急進的な活発化)

幼児が浸るこの時期の言語データは初期データ (Primary Data) と呼ばれ、幼児の脳内で母語を決定する特別な機能を担っている。発話は二足歩行等の身体的条件の下に発達し、母語話者の誕生となる。母語の獲得は、脳の生得的な生理現象だといえる。

Ⅳ. 母語と概念的思考能力との関連性 —母語基盤の教育の認知的根拠—

Выготский (ヴィゴツキー) (1934) によると、別々の遺伝子に由来するとされる思考力と発話能力は、2・3才の頃に脳内で融合を開始する。幼児は沈黙して思考することができないため、外部から観察可能な自己中心的言語 (独り言) を発するようになる。この独り言は数年続いたのち、6・7才の頃に消えていく。これが言語と知性の融合が完了した兆候である。発話は理性的なものとなり、初等教育が始まる。言語には概念を宿す力があるため、以降、言語が思考を編成していく (図1参照)。

思考の編成に順当に準備されている言語、それは幼児期に獲得される母語なのであり、“母語基盤の教育” が推奨される認知的根拠を構成する。日本においては日本語が教育の言語として定着している。日本語の母語話者にとっての日本語は、初等教育から高等教育まで、更には高度な学術レベルに至るまで、最も順当に機能する思考の言語なのである。

Ⅴ. 母語と英語との狭間で —21世紀の言語運用能力像—

国際共通語 (リング・フランカ) となった英語学習に多大な努力とコストが費やされている。しかし、コミュニケーションの手段として学習する英語は、思考の言語としては母語である日本語にはるかに及ばない。リング・フランカとしての英語を介するコミュニ

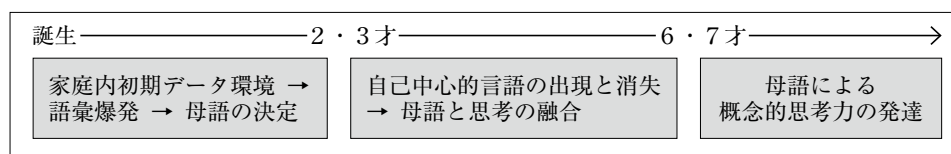


図1 母語の獲得と思考の発達 (Development of Conceptual Thinking in Mother-Tongue)

ケーションにおいて、英語を母語とする話者との間に言語格差が生じることは自明の理というものであり、非英語圏においては戦略的な言語運用能力像が求められる。

筆者（Katada 2002；片田 2018）は、情報技術革新が進む21世紀の言語運用能力像を「サイバー・リング・フランカによって実現されるオート（マルチ）リンガリズム」として提唱した。コンピュータ技術者が開発するサイバー・リング・フランカ（自動通訳・翻訳機）により、人々はそれぞれの母語を思考の言語として使い、英語を介することなく、多様な母語話者とのコミュニケーションが可能なオートマルチリンガルとなるのである。前節（ⅢとⅣ）が示唆する通り、母語は誰しものが獲得する人間の属性のひとつであり、この点において言語運用における公平性が担保されているといえよう。言語格差の解消にもつながるこの言語運用能力像は、母語の確固たる知識と運用能力の重要度が増すことを意味するものでもある。

尚、本節で述べたオート（マルチ）リンガリズムの実現は、外国語学習がもたらす認知的なメリットを否

定するものではない。情報技術革命があらゆる分野を巻き込んで進行する21世紀にあって、学習によって習得する英語“English as a lingua franca (ELF)”の運用能力を補完する手段として、コンピュータ技術者が開発し提供する“cyber lingua franca (CLF)”があり、これらを戦略的に活用することにより、公平なコミュニケーション環境が実現されることを謳ったものである。

参考文献

- 1) Выготский, Лев Семёнович (1934). Мышление и речь. М.-Л.: Соцэкгиз. 柴田義松訳『思考と言語』新読書社2001年
- 2) Chomsky, Noam (1957) Syntactic Structures. Berline/New York: Mouton de Gruyter
- 3) Katada, Fusa (2002) “The linguistic divide, autolinguals, and the notion of education-for-all.” Proceedings of the International Conference on Computers in Education (DOI:10.1109/CIE. 2002.1186327)
- 4) 片田房 (2005) 世界言語文化図鑑：世界の言語の起源と伝播. (翻訳書) 東洋書林
- 5) 片田房 (2018) オートリンガル (AutoLingual) 時代の到来—AIテクノロジーが外国語運用能力像に革命の変貌をもたらす—, サイエンスオピニオンWASEDA-YOMIURI ONLINE. (<https://www.waseda.jp/top/news/96971>)

The Universe of Language: Viewing the World and Man from the Linguistic Perspective

*Professor Emeritus, Waseda University
Faculty of Science and Engineering, Waseda University*

Fusa KATADA, Ph.D.

Understanding the human-specific innate ability to acquire language is quite significant especially when English has gained its status as an international language (a global lingua franca). After viewing the world languages and linguistic science, this article outlines how children's mother-tongue and conceptual thinking develop in their brain, and presents a new aspect of international communication in which the emergence of “cyber lingua franca (CLF)” can be an alternative to “English as a lingua franca (ELF)”.

Key words : Language Acquisition, Mother-Tongue Based Education, International Language, Cyber Lingua Franca, Auto-Multi-Linguism